

慢性副鼻腔炎の患者におけるデュピクセント皮下注（ペン型製剤）導入時の服薬指導の最適化

四国調剤グループポピー薬局¹⁾、四国調剤グループ²⁾、四国調剤グループ四国調剤はるの薬局³⁾
○梅原 千晶¹⁾、氏原 浩善¹⁾、浜田 嘉則²⁾、稲本 悠²⁾、小島 理恵³⁾

【目的】デュピクセント皮下注はアレルギー性疾患の治療薬であり、既存治療で効果不十分なアトピー性皮膚炎、喘息、鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎に適応がある。自己注射薬であるため、正しい手技により確実に注入できないと十分な治療効果が得られない可能性がある。しかし、適応疾患の条件を満たす患者が少ないため、導入している医療機関が少なく、指導するのに十分な知識を有している薬剤師は現状多くないと考える。今回、複数の薬局で患者情報を共有した上で、患者アドヒアランスの向上と服薬指導内容のブラッシュアップを目的とし、患者用リーフレットの作成を行った。【方法】指定難病である好酸球性副鼻腔炎の患者3名において、デュピクセント皮下注初回調剤時からの薬歴を見返し、追加で聞き取り調査を行った。内容としては、自己注射の手技、症状改善を自覚した時期、副作用の有無、注射予定日（2週間に1回）のずれの有無、治療効果と金額・手間を天秤にかけた上での治療継続の意志について聴取した。【結果】1名の患者において、病院で初回注射を行った際に腕に注入したと聴取。自己注射を行う場合は確認窓を視認する必要があるため、腹部か大腿部に注入する必要がある。自己注射の手技の確立が不十分であると判断し、デモ器を用いて指導を行った上で貸し出しを行い、自己注射前に再度流れを確認するよう指導した。また、副作用として好酸球の一時的な増加があるが、例として動悸や関節痛など具体的な症状を挙げたところ、腕や肩が痛くて動かしにくいような違和感があるが、副作用とは思っていなかったと回答があった。【考察】サノフィ株式会社によるとパンフレットを初回調剤時に渡しているのだが、ページ数が多いこともあって患者側で内容を全ては把握できていない可能性がある。また初回調剤時にパンフレットを用いて一通り内容を説明しても、一度に覚えるのは難しいと判った。したがって、治療段階に合わせた指導ができるよう、注射の手技、治療効果、副作用についてそれぞれ1枚ずつにまとめたリーフレットを作成した。要点がまとまっているので患者側も内容を把握しやすく、薬剤師側も指導内容の標準化により質の向上が期待できる。今後はグループ内の薬局で情報共有を行い、初めてデュピクセント皮下注を導入する薬局でも指導に活用できるよう今回得た知識を広めていく。